

太井遺跡(その2)現地説明会資料

昭和61年11月22日

財団法人 大阪文化財センター

はじめに

大阪府教育委員会と(財)大阪文化財センターでは、近畿自動車道と歌山線の建設に伴って、本年4月から南河内郡美原町太井に所在する太井遺跡の発掘調査をおこなっています。遺跡は黒姫山古墳の南から西除川の東岸までの広い範囲におよびます。そのため、発掘は三つの調査区に分けておこなわれており、今回報告いたします地区はその中間にあたる第2調査区のHトレンチを中心とした部分です。

周辺の環境としましては、多数の短甲等を出土した黒姫山古墳をはじめとして飛鳥から奈良時代の豪族の建物群で知られる平尾遺跡が南東約1kmにみられ、中世丹南鋳物師の拠点とも考えられる日置荘の地は西除川を隔てた直ぐ西にあります。



17. 太井遺跡 18. 余部遺跡 184. 日置荘遺跡 240. 日置荘北遺跡 15. 真福寺遺跡 3. 黒姫山古墳

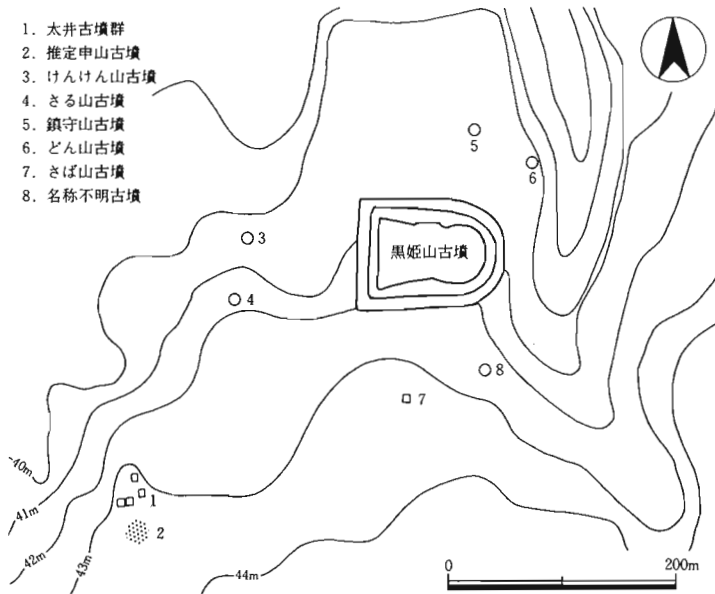
周辺の遺跡 (1 : 20000)

古墳群

太井遺跡において検出されました古墳時代の代表的な遺構は古墳および埴輪円筒棺です。古墳は現在のところ方墳と考えられます4基を確認しています。古墳はいずれも後述する掘立柱建物群を造った際に破壊されておりまして周溝の痕跡を検出したにとどまりました。規模はいずれも8m×7m前後を測る非常に小型の古墳です。これらの古墳からはそれぞれ須恵器が出土しており、若干の前後はあるものの5世紀後半代に相次いで築造されたものであると考えられます。



遺構検出状況



黒姫山古墳周辺地形復原模式図

また、古墳時代に属すると考えられます遺構に円筒埴輪を利用して埋葬施設とした埴輪円筒棺があります。

埴輪円筒棺は1号墳と2号墳の間に位置し、3個の円筒埴輪を組み合わせて造られていました。ここで使われていた円筒埴輪は隣接する黒姫山古墳出土の円筒埴輪と似ており、この埴輪円筒棺も黒姫山古墳とほぼ同時期の5世紀後半代に造営されたものである可能性が考えられます。

したがって、この埴輪円筒棺も当遺跡で検出しました古墳と同じ時期に造られたものと考えられます。

その他に埴輪円筒棺の南側で土坑墓が1基検出されています。

以上が当遺跡で検出されました古墳時代の遺構ですが、その他に古墳時

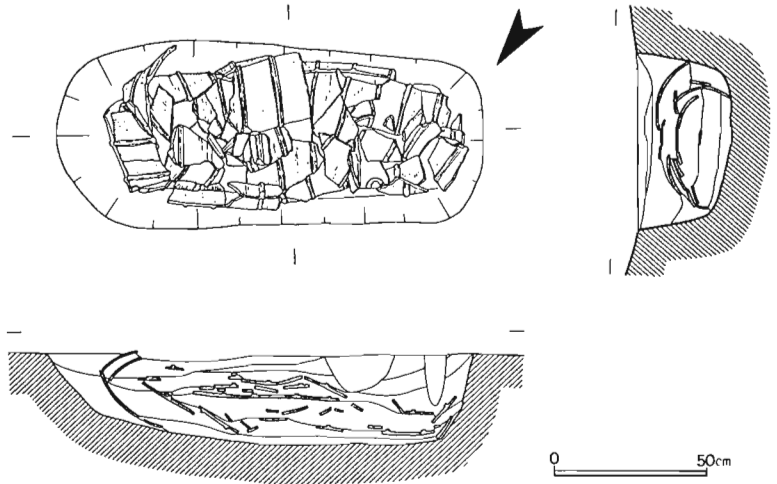
代に属する遺物が後世の遺構および包含層等から出土しています。

その代表的なものとして井戸に再利用されていた円筒埴輪をあげることができます。

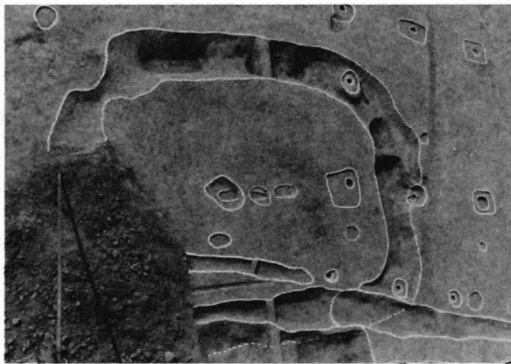
円筒埴輪は黒姫山古墳に立てられたものとは大きさも全体の形も異なります。円筒埴輪

棺に使われていた埴輪が大きなもので高さ75cm前後であったのに対して、井戸に再利用された円筒埴輪には1.2mを越えるものもあります。はっきりとした年代は判りませんが黒姫山古墳にやや遅れる6世紀代のものと考えられます。

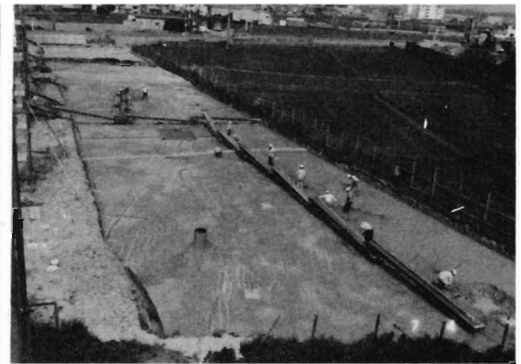
さて、当遺跡の調査によって判明した古墳時代の様相はおおよそ以上ようになります。井戸に再利用されていた円筒埴輪はその大きさからするとさほど遠くない所から運ばれてきた可能性が強く、遺跡の南側には申山という小字も存在しており、そこにこのような埴輪を並べた古墳が存在した可能性も考えることが出来ます。また、当遺跡で検出された古墳はいずれも非常に小さな方墳であり、黒姫山古墳のような前方後円墳とは形の点でも規模の点でも違いがみられます。このような違いは葬られた人物の性格を考える上で非常に重要であり、破壊された周辺の古墳を含めた検討が必要となるでしょう。



埴輪円筒棺



1号墳



発掘作業風景

飛鳥・奈良時代建物跡

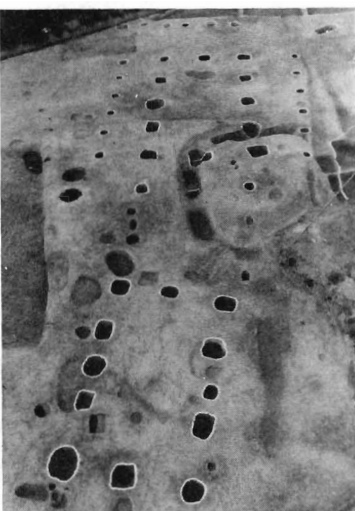
飛鳥時代を中心とした時期の遺構として、掘立柱建物群とそれを囲む溝、そして二つの井戸があります。

溝は東西または南北に軸をあわせており、このうちトレンチを東西に横切る溝63からはこの時代に使われた須恵器・土師器の皿・甕などが多く出土しました。建物群は現在少なくとも10棟を数えることができ、このうち5棟は倉庫と考えられるもので、西北にまとまって検出されました。

住居と考えられる建物跡3・4は倉庫群の東で、南北に並んでいます。なかでも建物3は東西と南に庇（ひさし）をもつ目

立ったものと言えるでしょう。井戸は溝63の北側（井戸10）と溝8の南側（井戸7）に接して検出されました。井戸10は

直径が1mほどですが、埋土の上層から飛鳥時代の須恵器・土師器

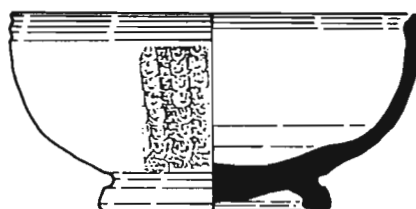


建物跡3・4



和同開珎

を出土し、中程から下は円筒埴輪を井戸枠に転用している点でまれな構造を示しています。現在までに深さは3m以上を測り、埴輪の井戸枠も3段あることが判っています。なお、この埴



新羅系土器（1：2）



溝63遺物出土状況



柱穴断面



同調査中

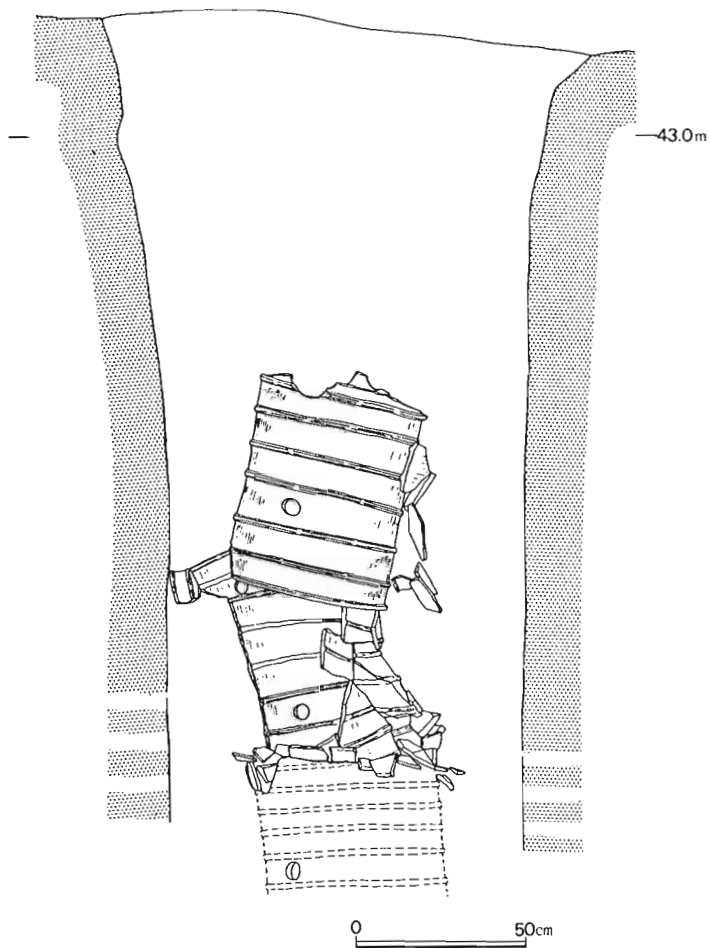
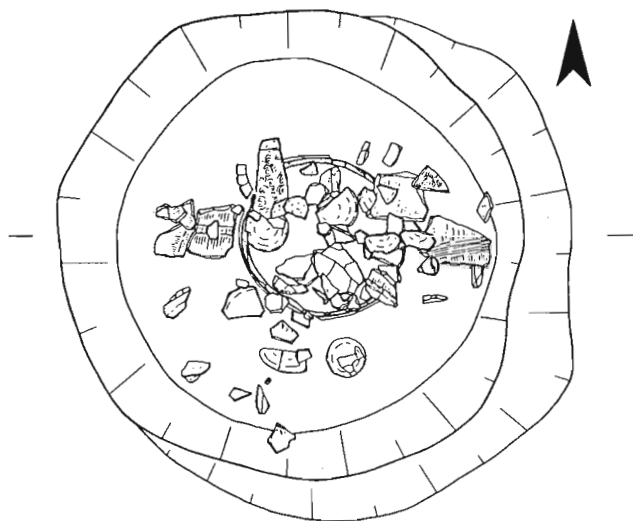
輪に類似した埴輪は堺市の日置荘西町窯跡群で焼かれていたことが知られています。そして、特殊な遺物として溝53・63から新羅系土器と金装の耳環が出土しました。

新羅系土器は建物群とほぼ同時期の7世紀代のものと考えられ、いわゆる統一新羅土器とされるものです。外面に見られる馬蹄形のスタンプ文様がその特徴です。

このような土器の出土は全国的にみても出土品としては30例に満たないものです。さらに、その多くは台付長頸壺であり、今回出土した碗はおそらく日本で初めての出土と考えられるでしょう。

さらに、溝63の南側からは竪穴状の遺構が検出され、日本で最初に造られた貨銭である和同開珎が出土している他、銅滓・埴塼・焼土が検出されています。また、近接する遺構からもフィゴの羽口・埴塼が出土しています。

以上のように、削平された古墳群とその上に展開する建物群を軸に、新羅系土器と銕造関係遺物とのかかわりを検討することにより、この地域の古代史を僅かでも解明してゆきたいと考えております。



井戸 10



なお、国道309号線を隔てた東側の第1調査区では現在サバ山古墳推定地を調査しており、周溝と考えられる遺構が検出されております。また、町道を隔てた西側の第3調査区では製鉄に関係すると考えられる遺構を調査中です。